

歴史時代の子持勾玉

佐田 茂

一、はじめに

子持勾玉は、一般的には古墳時代、五・六世紀の産物とされている。全国的に出土しているが、用途については、今のところ明確な見解はないようである。一方、扁平な体部に、腹にだけ突起をもつ滑石製の子持勾玉があり、古墳時代のものとは異なるところから、私は新しい子持勾玉と呼んできた。

昭和四五（一九七〇）年に福岡県宗像市沖ノ島の沖ノ島一号遺跡から出土したことを契機として注意するようになったが、現在でも出土数は少なく、位置づけがむずかしい。沖ノ島からは古墳時代の子持勾玉も多く出土しているが、両者に関連性を求めているのか、時代は大きく離れており、今もって悩んでいるのが現状である。

歴史時代の子持勾玉は、今のところ、藤原京・難波宮出土のものがいちばん古いようだが、後続するものがなく、特殊なものとするほかはない。祭祀品であることは確実なので結論はでないが、背景について、すこし考えてみたい。

二、分布と出土状況

知見するものは、九州では、一二ヶ所一四個、九州以外では、二ヶ所三個である。九州でも北部九州域がほとんどで、いちばん南でも福岡県の豊前市で、一〇例が筑前国のなかにおさまっている。九州以外では、摂津国と遠く離れた毛野国のみ知られているが、これは筆者の収集能力の欠如による可能性もある。

- 一 福岡県宗像市沖ノ島一号遺跡^①
- 二 福岡県宗像市沖ノ島参道採集
- 三 福岡県宗像市宗像大社所蔵品
- 四 福岡県鞍手町火ノ尾一号墳^②（二点）
- 五 福岡県古賀市大田町遺跡^③
- 六 福岡県福津市津丸五郎丸遺跡^④
- 七 福岡県太宰府市都府楼南門溝^⑤
- 八 福岡県大野城市中通S二号墳^⑥
- 九 福岡県春日市九州大学筑紫地区^⑦
- 一〇 福岡県春日市向谷遺跡^⑦

- 一一 福岡県豊前市荒堀中の原遺跡S B〇九住居^⑧
- 一二 福岡県豊前市荒堀中の原遺跡S B三一住居^⑧
- 一三 大阪府大阪市難波宮(二点)^⑨
- 一四 群馬県高崎市八幡遺跡^⑩

出土状況をみてみよう。明確に遺構に伴うものは少ないので、むずかしいが、或る程度わかるものを見ると、京跡、祭祀遺跡、住居跡、包含層となる。

祭祀遺跡出土は、沖ノ島一号遺跡である。沖ノ島古代祭祀のいちばん最後で、奈良・平安時代の遣隋使・遣唐使派遣に関係した祭祀が行われたと考えられている。具体的に第何次派遣と決定することはできないが、派遣期間を通じて使用されていたことは、出土遺物の内容から明らかである。滑石製形代、須恵器などが大量に集積されている。

一号遺跡は、発掘調査報告書で露天祭祀とされて以来、古代祭祀の最終形態と理解することが定着しているが、私自身は祭祀場として使用されたのではなく、供献された品々を祭祀終了後に集積した場所と考えている^⑪。三号遺跡とされているA号巨岩の岩陰にも一号遺跡と同じ形代、土器が見られる。岩陰を祭場として使用するのは、沖ノ島では、伝統的な祭祀形態で、歴史時代の祭祀が、岩陰と平地で並行して行われていたと考えることもできようが、巨岩を磐境と認識していた祭祀の実態があるので、三号遺跡が祭祀場、一号遺跡が供献品の集積場所と区別した方が数百年に及ぶ航海安全の祈願所としての役割も理解しやすい。

関係する子持勾玉は二個出土しているが、滑石製形代のなかには、バナナのような大形の扁平な勾玉も多くあり、関連も考えられるが、よくわか

らない。

住居跡出土は、福岡県豊前市の荒堀中の原遺跡S B〇九住居、S B三一住居出土の二点のみである。扁平半月形のものである。住居出土は、古墳時代のものでは、福岡県太宰府市の裏ノ田遺跡六号住居・二一号住居、八女市の高野町遺跡二七号住居、佐賀県吉野ヶ里町の下石動遺跡S B〇二四住居、瀬ノ尾遺跡S H〇六六四住居にみられ、福岡県粕屋町の松ヶ上遺跡、福岡市の立花寺遺跡では、集落内での製作もみられる。

荒堀中の原遺跡は、古墳時代後期と奈良時代の集落遺跡で、竪穴住居三棟、堀立柱建物二六棟、倉庫一六棟などが調査されている。すぐ近くには、同じ性格の荒堀車地遺跡もある。S B〇九住居は、平面台形の竪穴住居で、西壁中央にカマドを持ち、南側柱穴間に滑石製子持勾玉一個と小玉一二個が糸で連なっていたかのような状況で出土している。

古墳からの出土は、福岡県鞍手町の火ノ尾一号墳、大野城市の中通S二号墳の二例であるが、いずれも初葬に伴うものではなく、追葬もしくは、後の何らかの儀式に使用されたものである。中通S二号墳では、六個の土師器と共伴している。土師器は鉢形で、口縁が大きく開き、器壁も厚く、底も丸みがある。同種のものが沖ノ島一号遺跡からも出土している。ほかでは見ることでできない器形のもので、両者の関連に興味が引かれる。中通S二号墳のある大野城市には、九州最大の牛頸窯跡群があり、この種の鉢の生産・供給で、沖ノ島と関係があったことを示すものとなり、太宰府が沖ノ島祭祀に関与していたことの証しにもなる。

古墳からの出土とはいっても、初葬よりは相当時間がたってからのもので、先祖供養的なものを想定することができるのかも知れない。

遠く離れた群馬県高崎市の八幡遺跡では、楕円形祭祀跡の中央上層部が

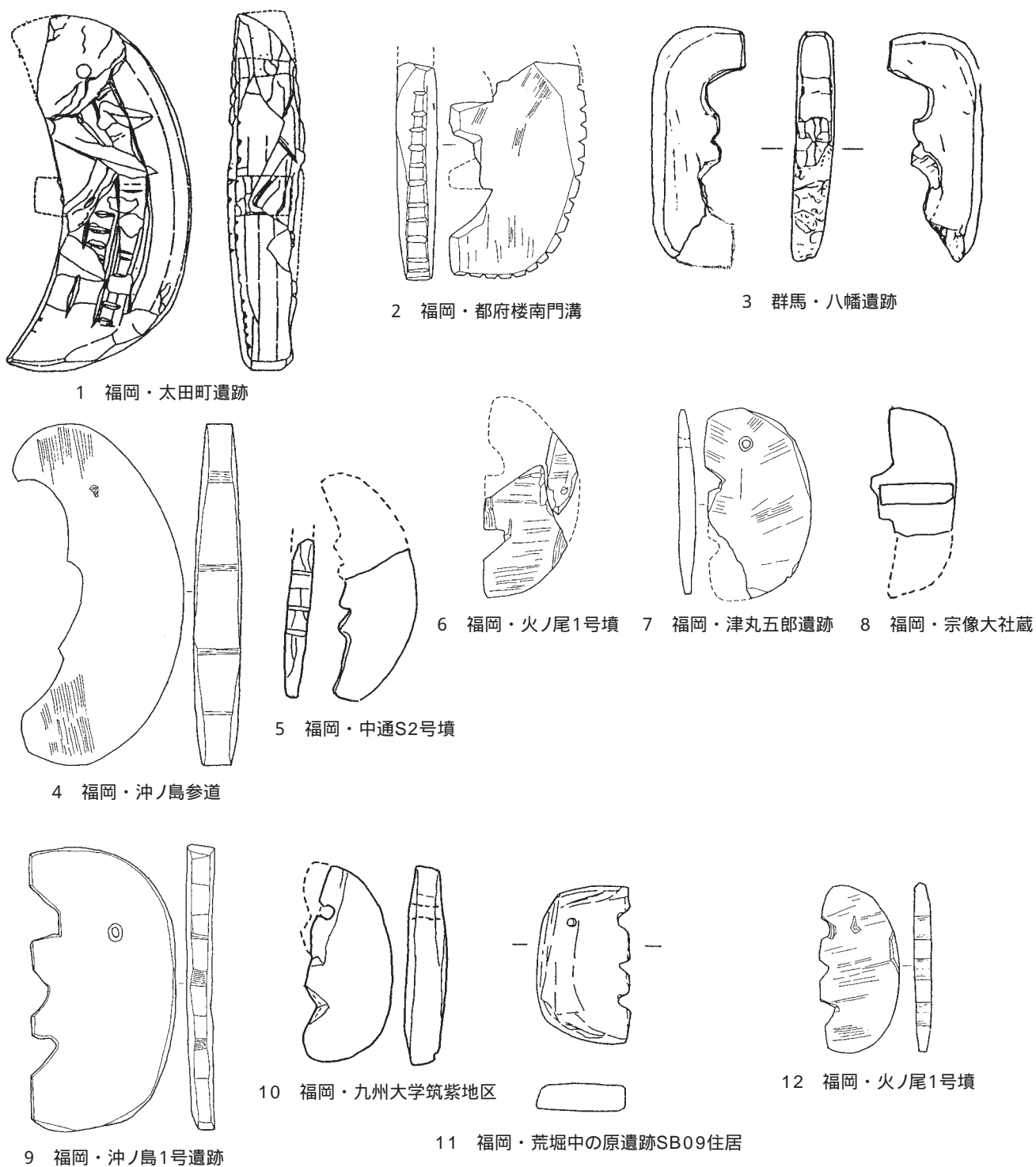


図1 歴史時代子持勾玉実測図(1)(縮尺1/2)

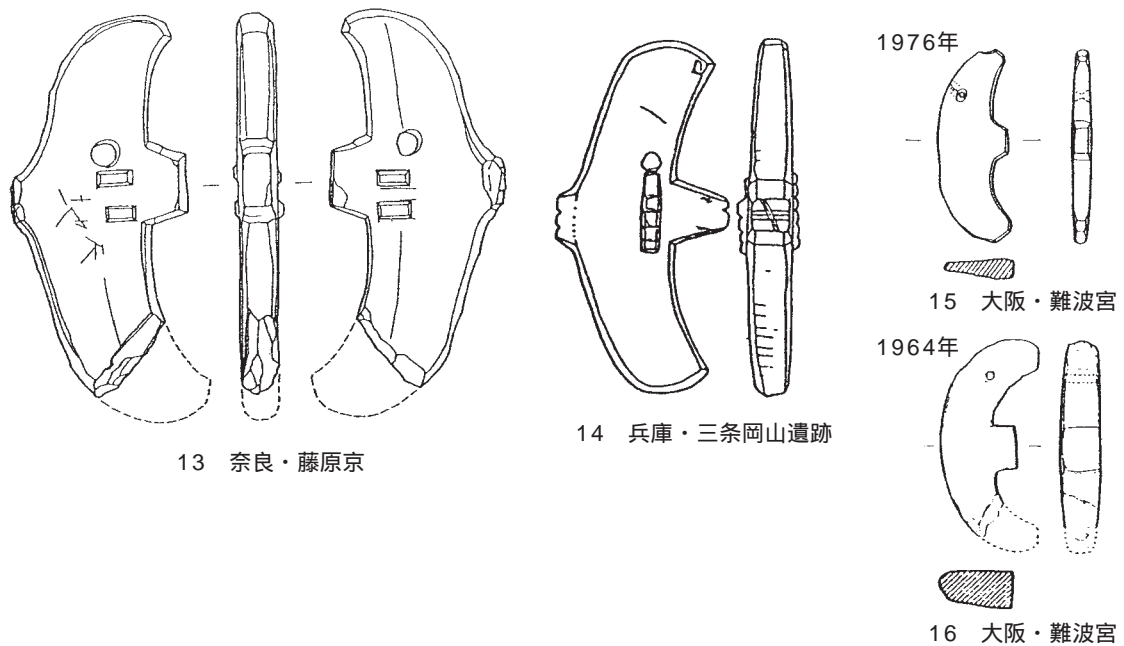


図2 歴史時代子持勾玉実測図（2）（縮尺1/2）

ら、須恵器杯、土師器甕とともに出土している。祭祀跡は、六世紀後半と報告されている。

三、形状と分類

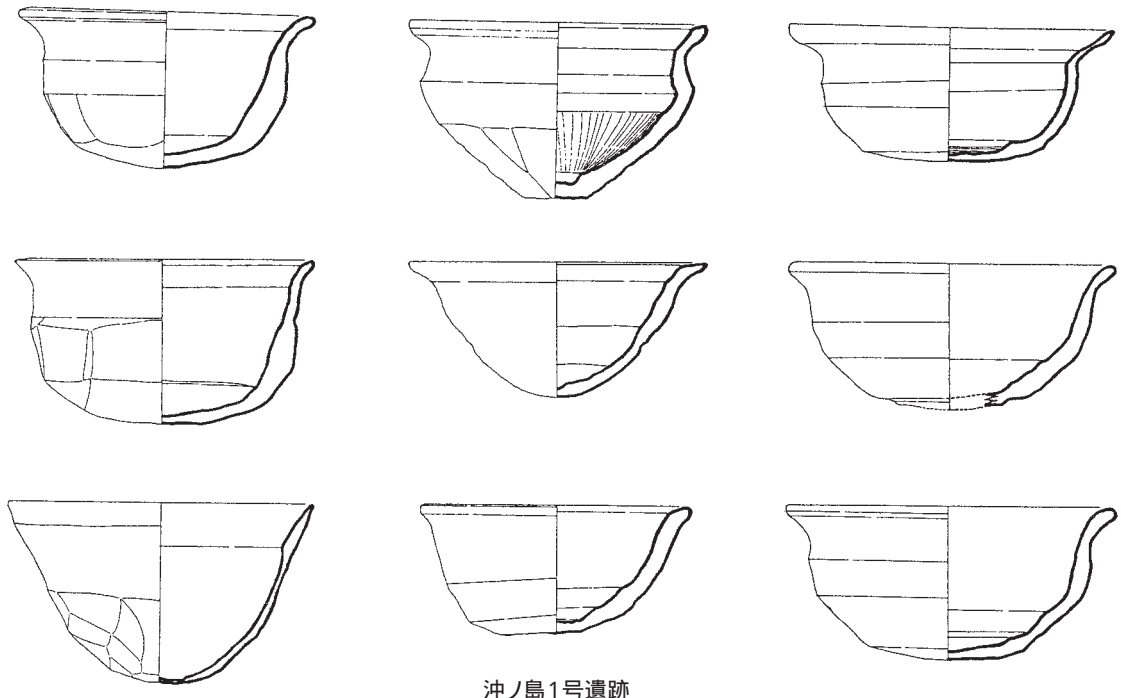
歴史時代の子持勾玉の基本的な形状は、体部が扁平で、背、側面に子を持たないで、腹のみに子を削り出していることである。

九州出土の新しい子持勾玉については、かつて、四つのグループに大別したことがある¹²⁾。A、親勾玉の頭部はすこし整えられ、背の方が幾分薄くなり、弦の部分に三ヶ所に削りが入り、勾玉の名残がある。背には鋸歯状に細かい削りが入っている。B、親勾玉の頭尾が整えられ、三日月を呈し、なめらかな印象のある勾玉である。腹に鋸歯状の突起が二、三ヶ所取り付けられているが、勾玉形をしていない。C、親勾玉は半月状で、弦の部分に三ヶ所削りが入っており、腹の子が勾玉の名残を残しているもの。D、親勾玉は半月形で、弦の部分に二ヶ所削りが入っており、腹の子が方形をしているもの。と分けたことがある。

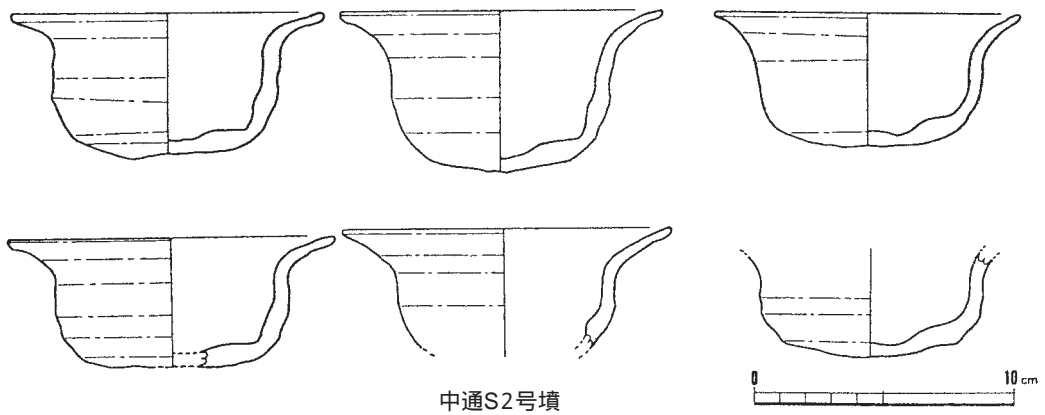
しかし、これは、古墳時代の子持勾玉に引きずられて考えたきらいがあり、改めて分類基準を考えてみよう。Ⅰ、体部の格好は、頭部、尾部にくに従い細くなるもので、一般的な勾玉の形状に近い。Ⅱ、体部は幅広で、半月形を基本とし、頭部端、尾部端、腹の子前面のラインが直線になっている。半月形の弦の部分を削り込むことによって、腹の子をつくり出している。に大別される。

腹の子の格好は、a. 凸形、b. M字型、c. 波形、に分類できる。

この二つの形態が、歴史時代の子持勾玉の形式分類の主要要素となる



沖ノ島1号遺跡



中通S2号墳

図3 共通する土師器実測図 (1/3)

が、今のところ時期差による形態の変化をたどることができない。これをもとに出土品を分類すると、微妙なものも含まれているが、次のようになる。

- I a 大田町遺跡
- I b 太宰府南門溝、八幡遺跡
- I c 沖ノ島参道
- II a 火ノ尾一号墳、津丸五郎丸遺跡、宗像大社蔵
- II b 沖ノ島一号遺跡、九州大学筑紫地区、荒堀中ノ原遺跡、火ノ尾一号墳

本論で述べている歴史時代の子持勾玉とは異なって、古墳時代から使用された子持勾玉で、歴史時代まで継続するのが、私が三輪型と称している子持勾玉である。奈良県三輪山周辺にみられるこの種子持勾玉は、大平茂氏によれば、五世紀後葉から七世紀中葉まで使用され、「天地」銘のある藤原京出土のもので終わりを告げている。そのうち、七世紀代におさまるものとして、櫻井市大神神社禁足地出土の二点、藤原京出土一点、場所は離れるが、兵庫県芦屋市三条岡山遺跡出土の一点を挙げている¹³⁾。

形態的には、背に山形の子を持ち、側面に方形の削り出しをもっており、同地出土の古墳時代子持勾玉からの変化をたどれるし、時代的な連続性も指摘されている。そういう面では、古墳時代子持勾玉の終焉を示しているものと理解でき、新しい子持勾玉とは性格を異にしている可能性もあるが、新しい子持勾玉を考える上で無視できない。

四、祭祀の内容

出土例の少ない現状では、祭祀の内容を考えることは極めてむずかしいが、可能性を求めて考えてみよう。

沖ノ島から最も大型の子持勾玉が出土していること、バナナ型の扁平な大型勾玉も多数出土していることからすれば、新しい子持勾玉は、沖ノ島祭祀から始まったと考えることもできる。沖ノ島がその後神社祭祀へ発展したのは、宗像大社のルーツが沖ノ島に求められていることからもうかがい知れる。ほかの遺跡での出土も明確にはできないが、類似した祭祀が行われたことも考えられ、火ノ尾一号墳、中通S二号墳の墳墓への供献も埋葬に伴うものではなく、祖霊信仰的なものを考えれば、極端に異なるものではない。とくに中通S二号墳の鉢形の土師器は、沖ノ島一号遺跡のものによく似ている。福岡県大野城市の牛頸窯跡群の土器が遠く離れた沖ノ島に供献された可能性さえも考えられる程で、律令時代には、太宰府も沖ノ島祭祀に関係していたことをうかがわせる。

一方、畿内では、三輪型子持勾玉の出土が京跡、鳥居状遺構、禁足地にみられ、三輪山と大神神社の関係は、沖ノ島と宗像大社と同様であると考えることができるし、藤原京井戸出土の「天地」銘は、鍵となる資料といえよう。

五、おわりに

歴史時代の子持勾玉について考えてみたが、何せ出土数が少なく、特殊

な祭祀品としか言いようがないのが現状である。

今のところ、分布も筑前、豊前、毛野に限定されており、なかでも筑前が飛び抜けて多い。とはいっても一六点である。形態的には、腹にのみ子を持つのが基本で、古墳時代の背、腹、側面に子を持つものとは異なっており現在のところ、時間的な連続性を認めることはできない。ただ、三輪型系統の子持勾玉は、古墳時代のものとの形態的連続性を認めることができるのは前述したとおりである。藤原京出土のものは、七世紀第三四半期とされており、時間的な差は相当縮まってきつつはあるようだが。

祭祀の対象が何なのかは、むずかしいところだが、井上光貞氏は、沖ノ島祭祀の変遷から、「葬祭未分化の状態」では、人の靈魂であると神であるを問わず、同じやり方で、それを礼拝し、崇敬していた。これに反し、「葬祭分化」の状態にはいると、靈魂と神との区別が意識され、それぞれの領域で宗教儀礼がおこってくる。すなわち葬儀と祭儀とが成立する、とみたいのである。」¹⁴とし、一号遺跡を祭儀の成立した段階と捕えたいとしている。天神地祇を対象とした祭儀で新しい子持勾玉は使用されたもので、藤原京出土の子持勾玉の「天地」銘は傍証になろう。

北部九州に集中している理由は、はっきりさせることはできないが、沖ノ島祭祀が祭儀の成立に大きな役割をはたしたとすれば、理解できないこともないが、決定的なものとは言えない。

【註】

- (1) 宗像大社復興期成会編『宗像沖ノ島』宗像大社復興期成会 一九七九
- (2) 小田富士雄「九州」『神道考古学講座』第二卷 雄山閣 一九七二
- (3) 石山勲「福岡県糟屋郡古賀町所在遺跡群の調査二」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文

化財調査報告』一七 福岡県教育委員会 一九七八

- (4) 松岡史「津丸五郎丸遺跡」『福岡バイパス関係埋蔵文化財調査報告』福岡県教育委員会 一九七三

- (5) 佐田茂「九州の祭祀遺跡」『九州考古学の諸問題』福岡考古学研究会 一九七五

- (6) 松岡史・副島邦弘・舟山良一ほか『牛頸中通遺跡群』『大野城市文化財調査報告書』第四集 大野城市教育委員会 一九八〇

- (7) 西健一郎氏の御教示による

- (8) 小田富士雄編『豊前市史・考古資料』豊前市役所 一九九三

- (9) 北武蔵古代文化研究会編『古墳時代の祭祀』東日本埋蔵文化財研究会 一九九三

三

- (10) 神戸聖語・福岡敬一「八幡遺跡」『高崎市文化財調査報告書』第九一集 高崎市教育委員会 一九八九

- (11) 佐田茂『沖ノ島祭祀遺跡』ニュー・サイエンス社 一九九一

- (12) 古賀寿子・佐田茂「九州出土の子持勾玉」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』第八集第一号 佐賀大学文化教育学部 二〇〇三

- (13) 大平茂「三輪山麓出土の子持勾玉祭祀とその歴史的背景」『原始・古代日本の祭祀』同成社 二〇〇七

- (14) 井上光貞『日本古代の王権と祭祀』東京大学出版会 一九八四

(元佐賀大学地域学歴史文化研究センター併任(文化教育学部)教授)